

# 歴史散歩



## はた 波多神社の礎石と せき ばんこうじ 班光寺跡

一志町八太にある波多神社の境内には、直径1mほどの大きな礎石があります。礎石とは、瓦ぶき建物などの土台として柱の基礎に据え、直接地面と接することによる腐食や老朽化を防ぐために用いられる石です。花こう岩で作られたこの礎石の上面には2つの穴があり、柱が乗る部分である柱座と思われる直径60cmほどの円形の盛り上がりがかすかに確認できます。

この礎石はもともと、波多神社から700mほど南にあるJR名松線伊勢八太駅辺りに存在した班光寺跡と呼ばれる古代寺院のものといわれています。なぜこの礎石が波多神社に運ばれたのかは分かっていませんが、当時の様子を今に伝える重要な遺物の一つです。



波多神社にある礎石

現在、伊勢八太駅周辺に班光寺跡の面影を留めるものは残っていませんが、かつて農作業の際にこの周辺で多くの礎石や瓦が見つかっており、昭和56年発行の「一志町史」にはこれらの礎石や瓦が紹介されています。また、平成元年と平成2年に行われた寺院の範囲を確認するための発掘調査では、その全体像を明らかにすることはできなかったものの、出土した瓦の文様などにより、7世紀末から8世紀前半の寺院であったことが確認されました。



班光寺跡から出土した瓦

そのため、平成2年に行われた水田の区画整理では、遺跡を保護する目的で、班光寺跡と推定される範囲に盛土が施され、今も地中に遺跡が保存されています。

この寺院が建立された飛鳥時代から奈良時代にかけては、大陸から伝来した仏教文化が地方へと波及し、地域の有力者らが権力を示す象徴を古墳から寺院へと変化させた時期です。まだ、竪穴住居や掘立柱建物が一般的であったこの頃、瓦ぶきの寺院建築は威容を誇る巨大な建造物であったことでしょう。



発掘調査時の班光寺跡(平成元年)

